



間宮林蔵は安永9年(1780)に常陸国筑波郡上平柳村(現つくばみらい市上平柳)に生まれました。名は倫宗、号を蕉翁といい、林蔵は通称です。

神童と呼ばれた林蔵には、いくつかのエピソードが語り継がれています。小貝川の堰止め工事にあたって、効果的な方法を幕府役人に教え、そこで認められて江戸に出ることになりました。

寛政11年(1799)師の村上島之允に従い、初めて蝦夷地へ渡ってから、新道開発や植林、測量など、北邊で20年近く活躍し、蝦夷・千島・カラフトにおいて数々の華々しい業績を残しています。



間宮林蔵の生家 (県指定史跡) 昭和30年11月25日指定

昭和46年に現在地に移築復元しました。

## 間宮林蔵 -江戸時代の探検・測量家-



間宮林蔵のカラフト探査経路

第一回探査経路  
第二回探査経路

間宮林蔵の業績の中で特に注目されるのは、「間宮海峡」を発見したカラフト探査です。

文化5年(1808)幕府の第5回カラフト探査のため、普請役松田博十郎と共にラッカまで行きました。同年から翌年にかけて、度々島林蔵としては度々の探査に出かけます。そしてカラフトの北端に近いナニワーに到達、カラフトが完全に島であることを確認しました。

林蔵はしばらくノテに滞在し、中国大陸への調査を敢行しました。これらの記録は「東洋地方紀行」「北夷分界余談」「北緯東島地圖」として著され現在に伝わっています。

大陸とカラフトの間は後にシーポルト

が著した「日本」という本の中で「間宮海峡」と名付け全世界に紹介されました。

「間宮林蔵」の名は、世界地図に名を残すただ一人の日本人といわれています。



間宮林蔵関係資料 (市指定文化財) 平成4年3月3日指定

この墓はカラフト探検に出発する前に死を悟りて建てたもので、高さ53cmの百姓としての小さな墓です。

専称寺境内の間宮林蔵顕彰碑 (明治43年建立) の後ろにあります。



間宮林蔵の墓

(県指定史跡) 昭和30年11月25日指定

この墓はカラフト探検に出発する前に死を悟りて建てたもので、高さ53cmの百姓としての小さな墓です。

専称寺境内の間宮林蔵顕彰碑 (明治43年建立) の後ろにあります。

